英国におけるフットボールの歴史に関する研究(6)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦, 修司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20417

英国におけるフットボールの歴史に関する研究(6)

秦　修司

A Study on History of Football in Britain (Ⅵ)

Shuji HATA

緒　言

英国のフットボールの歴史において，フットボールは，戦時における軍事訓練の妨げになるため，第二に街路でのフットボールは不法妨害となったために反対された。16世紀になると，フットボールは，ピューリタンによって宗教上の理由で攻撃された。それは，その目標をフットボールに，そして一般的には，娯楽・スポーツの，特に日曜日の娯楽・スポーツに定めた攻撃であった。

しかし，16世紀そして17世紀，フットボールにおいて，宗教上の論争とはまったく関係のない問題について数多くの見解もなされたのである。フットボールに極めて多くの関心が持たれたのは明らかである。フットボールのゲームのその乱暴さに批判をなした作家もいたし，かつては注目されることのなかったフットボールの長所を見出した作家もいた。

そこで，本研究では，16世紀そして17世紀におけるフットボールの宗教上の問題とはまったく関係のない様々な見解について追究する。

本　論

フットボールに極めて批判的であった中でもStubbes や James 1 世とは別に，最もよく知られたフットボール非難者は Thomas Elyot であった。彼は，The Boke named the Governour (1531) においてフットボールのゲームを非難している。

> 私が射撃において非常に称賛した適度という点で，何故，ボウリング，クロッシュ，九柱戯，鉄輪投げも同様に推奨すべきではないのかと言う人もあるだろう。真に最後の二つのものについては，高貴なる人はこれらを退ぞけるべきであるが，フットボールの場合も同様である。そこには獣的な憤怒と極度の暴力の他は何物もなく，またそこからは怪我が生じ，その結果，負傷した者には憎しみと恨みが残る。だからしてそれを永久に抑えつけなければならないのである。[1]

多分に，この一節が James 1 世に影響を及ぼし，彼の Basilikon Dron (1603) におけるフットボール批判につながったと思われる。[2] しかし，Elyot は The Boke named the Governour を著わした 3 年後に，彼のフットボールについての見解を若干改めている。著書，Castell of Health (1534) において，彼が猛烈な運動と称するものについて次のように述べている。

> 猛烈な運動とはgalyardes[3]の踊りやボールを投げそれを追って遊戯のように，激しい運動と素早い運動とを組み合わせたものである。フットボール競技もその 1 つに数

平成 5 年 9 月16日受理

えられるだろう……。[4]

Elyotはその中でフットボールの身体運動としての価値を不承不承ではあるかもしれないが，認めている。彼のフットボールについての考え方の修正は，多分に彼がギリシャの医学書やイタリアの医学書を読んだその影響によるものであろう。

しかし，保健・衛生について書き著した作家がすべて身体運動としてのフットボールの価値を認めたのではなかった。例えば，Thomas Coganは著書，Haven of Health（1584）のElyotに対する反駁の一節において，効用のある運動からフットボールを除外している。

……適度の運動には多大の効用がある。しかし，運動といっても真に様々である……。ダンス，跳躍，フットボール競技のような猛烈なものもある。[5]

様々な類の運動の身体的そして道徳的な効用については，かつてのイングランド人の関心になるところでなかった。しかし，ルネッサンスによって新しい考え方がもたらされた。他の問題と同様に身体運動の効用においてもイタリアの影響が感じられた。イタリアの著書を読みイタリアを訪れたイングランドの階級の間で，特にフットボールはこの時期に，多分に評判を得たと思われる。それはFlorenceにおけるカルチョのゲームの評判からわかる。カルチョのゲームは主顕祭[6]から四旬節[7]まで，毎晩，Santa Croseの広場において，財力ある若い騎士たちのリーダーシップのもとに，RedとGreenの２つのチームによって行われた。この時代，カルチョはイングランドで知られているどのものより確固たる規律があり，しかも公式のゲームであったので多大の関心を引いたことが予想される。カルチョのゲームを見て，好意的な報告をしたイングランド人のイタリア旅行者もいた。彼等のうちの１人であるRichard Lasselsは，著書Voyage of Italy（1670）[8]においてカルチョについての記事を書いた。又，カルチョを取扱ったイタリアの作品が数多あるが，有名なものは，Discorso supra il Giuoco del Calcio Fiorentioと有名なFlorentine家のGiovanni de' BardiによるMemorie Calcio Fiorentinoとである。BoccaliniのDe' Ragguagli de Parnaso（1612）ではカルチョのゲームの生き生きとした記述がなされているが，その書は２代Monmouth伯であるHenry Careyによって1656年に英訳され出版された。[9]それに添えた広告43号にFlorenceのカルチョについての記述のあることは注目に値する。Baccaliniはカルチョを，「若者の走，跳，格闘の育成に極めてすぐれている」と称賛しているが，そのゲームを政治的な安全弁としても称賛している。これらの状況において，イングランドの貴族は自国のフットボールに例え未完成なものであったにせよ，カルチョと比較してそれに比敵できる長所があったか疑問に思い始めていた。Careyが，著書Survey of Cornwall（1602）において，hurlingについての古典的な内容を書き著わしたとき，彼がそのモデルにイタリアのカルチョを頭に描いていたのは確実である。イングランドのゲームの中でもhurlingは極めて乱暴であったが，非常にカルチョに似ていた。Careyはhurlingの価値について決心つかずであった。というのは，彼はElyotやThomas Coganのようにhurlingの乱暴で猛烈な側面を忘れることができなかったからである。

私は男らしさと運動のために，ゲームをいっそう称賛すべきか，それから生ずる荒々しい騒々しさや障害のためにそれを非難すべきかうまく解決できない。；というのは，一面ではそれは彼等の身体を強く，たくましくそして機敏にし，そして彼等の心の中に勇気を与え，敵と直面させるからであり，；もう一方ではそれには多くの危険がともなうからである。[10]

George Owenは著書，Description of Pembrokeshire（1603）において，South Wales特有のナッパン（knappan）のゲームを称賛しているが，その価値を身体訓練というよりむしろ

道徳的訓練の側面を強調した。

選手は，どんな価値あるものに満足するのでなく，ただ名誉と名声とに満足する。先ず，自国の名声，第2に活動と勇敢な行為に満足するが，その2つのものは，彼等が世界的な富よりも価値あるものと看取す名誉と名声を得るために命あらん限り求める若者の心を激しく燃えたたせるのである。[11]

16世紀又は17世紀における最大のフットボール提唱者は Merchant Tailors 校と St. Paul's 校の校長であった Richard Mulcaster であったが，彼は，フットボールはそれを適切に利用することにより，際立った教育的価値があると主張した。フットボールに教育的価値があるとした点では，Mulcaster ははるかに先駆的であった。というのは彼の出した論議のいくつかは，19世紀になるまで再び耳にすることはなかったからである。この場合，直接イタリアの影響があったことが証明される。何故ならば，Mulcaster は1569年に初版が刊行され，そしてしばしば再版されたイタリアの Mercuriali の De Arte Gymnastica を用いたことが知られているからである。又，彼がカルチョに関する他のイタリアの作品を読んだ可能性もある。彼の功績はこれらの考えを発展させ，特に学校の生徒によってなされるようにそれらをフットボールのニーズに適合させたことである。

Mulcaster は，著書 Position (1581) における若者を教導する者は自分の生徒の体育にも知育には責任を持つべきことを説いたくだりで，3つの類いの競技，すなわち hand-ball, foot-ball および arm-ballについて言及しているが，フットボールについては次のように記述している。

私は，フットボール競技を第2の種類とするのであるが，仮にそれが健康増進のためにも体力養成のためにも大きく貢献するのでなかったならば，今日のような盛況を博することもなかっただろうし，現在のように至る所で行われるということもなかっただろう。そして私に言わせるならば，それに対する悪口はそれが正しい効用をもっていることの充分な証拠となるのである。それは普通は粗野な群集が集まり，脛に穴をあけたり，脚を折ったりして行われているために作法にかなったものとは言えないし，健康増進法の名にも値しないが，本来の姿に立ち戻らせるならば，人間の本性を助け，強め，元気づけるのである。この競技においては誰しも指導者の効用をはっきりと認めるだろう。というのは競技の審判をすることのできる者（指導者）が傍らに立って両チームの審判員を務めその立場で命令をする権限を持つならば，そういう不都合すべていとも簡単に是正されたことを知っているし，今後も是正されるだろうと確信している。否，彼等が問題に介入することもなく，理由なくして苦情が出ることもなくなるだろう。

監督下にあるもっと少数の人が両チームに分かれ，一定の位置につき，力をためすために，それ程乱暴に体当たりしあうこともなく，常に規則に従い，健康のために主に脚を用いてフットボールを行うのは同じ目的のために腕を用いてアーム・ボールを行うのと同様である。

そして，このようにして行うならば，フットボールは全身を強く筋肉たくましく，余分な物を降ろすことによって頭や下半身の負担を軽減し，腸のために良く，膀胱と腎臓から石や砂利を降ろす。それは乗馬の場合と同様に，効めは程々にしつつ大いに動かすことによって，弱い腿と臀部を助け筋肉を厚くすることによって弱い脛を助ける。しかし，向こうみずに走ったり，あまりにも力を出しすぎたりすれば，体内の導管が破れ組織の破烈の生ずることもしばしばである。[12]

フットボールが広く行われているという事実

は，フットボールには多少の長所があったに違いないことそしてそれによって健康や体力を高めることが可能であることを示している。しかし，不運にもフットボールのゲームは，概して誤用されており，「普通は粗野な群集が集まり，脛に穴をあけたり，脚を折ったりして行われているために作法にかなったものと考えないし，健康増進の名にも値しない」と記述されている。この点において，Mulcasterは，多分にイタリアの実践に基づいた示唆をしているが，彼はその矯正法として，「競技の審判をすることができ，傍に立って両チームの審判をして命令する権限を持つことのできる」誰か，「指導者」，つまりフットボールのコーチやレフリーを任命することであると述べている。そして，プレーヤーが適切なチームに組織され，プレーヤーをコントロールし指導するレフリーがいるとすれば，「プレーヤーが力を試すためにそれほど乱暴に体当たりしあうこともなく，それほど野蛮に相手を肩で押したり身体で押したりすることもなく，常に規則に従い，健康のために主に脚を用いてフットボールを行える」のである。

Mulcsater自身が組織化されたゲームをSt. Paul's校に導入しなかったならば，彼の助言を受け，組織化されたゲームを導入した者がいたという可能性はない。しかし，Stubbesが彼の有名な著書，The Anatomie of Abuses (1583) において，フットボールを痛烈に非難したその2年前に，このような記述することができたのは興味深いことであり，フットボールについて当時，満ちあふれていた幅広い考えや感情の流れをよく表している。

16世紀そして17世紀の緒々の学校においてフットボールのゲームが実際にどれ程行われていたかを示す証拠は極めて少ない。学校におけるフットボールについての最初の言及は，一般的に，当時，イートン校の校長（1502～1535）であり，かつてウィンチエスター校の校長であったWilliam Hormanが，著書 Vulgaria を出版した1519年に遡るとされている。その中に次のくだりがある。

Lusui erit nobis follis pugillari spritu tumens.[13]

（我々は空気を入れて膨らませたボールで競技するであろう。）

しかし，ここで記述されているラテン語のfollis pugillaris は hand-ball を意味しており，当時のフットボールにおいて，ボールを手で扱うことがボールを蹴るのと同じようにしばしばやられていることがあったにしても，校長である Willian Horman がフットボールでなく，何か他のゲームを意図していた可能性が大きい。

16，17世紀において，少年がフットボールを行ったかもしれないことの言及は数多あるが，確実にフットボールを行ったことについての言及は，1633年，Aberdeen Grammer Schoolの教師である David Wedderburn が難解な句を英語に翻訳した一続きのラテン語の文を含むテキスト・ブックであるVocabulaにおいてが，最初である。英語に翻訳された興味深い文書は，その文は脈絡がない。つまり，

サイドを決めよう。；あなたが先に決めなさい。
我々チームはここに来なさい。相手チームは何名か？
キック・オフしよう。それで試合を始めることができる。
ここにパスしなさい。
君はゴールを守れ。
相手よりも先にボールを獲得せよ。
行け。相手を阻止せよ。
相手に当たれ。
ボールをパスで戻せ。
よくやった！
君はなまけているぞ。
ゴールするには。
これが最初のゴールだ。
これが，2番目のゴールだ。これは3番目のゴールだ。

相手を近づけるな。そうでないと相手チームが勝つ。
君は注意しないと，相手がすぐにゴールする。
もっと上手にプレーしないと，我々は負ける。
やあ！　相手が勝った。
万歳！
彼は，実にいいプレーヤーだ。
彼がいなければ，我々が勝っていたのに。
来て，我を助けてくれ。
我々はまだよいチームだ。[14]

Aberdeen Grammer School の生徒たちがフットボールを楽しんでいたのは確かであり，そして当時の数多くの grammer school がそうであったに違いないように教師の是認をもってして，フットボールを行ったのである。しかし，当時の grammer school がフットボールを行っていたという証拠は，ウインチエスター校を除いては欠除しているが，ほぼ同時代の Robert Mathew の詩，De Collegio Wintoneusi から，ウィンチエスター校では，クリケットやフットボールが無害で許容できるゲームであると看做されていたことがわかる。

大きな音をたてるバットでボールたたき，
又は足で蹴ってはしばしばお前は楽しむ。
これらの無害なスポーツをすることが許されており。…[15]

一般的には，16世紀そして17世紀にはすべての学校の生徒たちがフットボールを行っていたと看做すことが可能であり，多分に，いまだにイートン校やウインチエスター校そして他の場所で行われている独自のゲームのいくつかの起源はこの時代に属するものであろう。

16世紀そして17世紀におけるフットボールの大学での位置づけは，有力な見解の cross-flow のもう１つの説明を与える。中世の大学においては，ほとんどと言ってよい程規則がなく，又，学則や規制がなかったので，そこでは乱暴な Street football が学生に人気があったことが想像可能である。High Street でボール遊びを行って死亡した Oxford の学生についての1303年の記録から，それについてのほのめかしが得られる。16世紀初期に，様々な学寮は学則によって厳重な管理が確立されたが，1555年に制定された Oxford の St. John's Cellege の学則では，実際に pila pedalis，つまりフットボールを禁じている。[16] しかし，1570年になってはじめて，大学の規律が組織化された。その年1570年，多くの問題を網羅した学則が Oxford と Cambridge のために作成されたが，その主旨は寄宿舎の長に，大学のメンバーよりも多くの権限を与えることにあった。そして，これらは1636年の極めて詳細なロード主義[17] の規則によって Oxford において施行された。そのようなことが，大学の規律の最初であった。事実，Oxford と Cambridge は，1858年に新しい規範が作成されるまで，これらの学則の下に統治された。

1574年，Cambridge の副総長と学寮長は，給費生が，「Gog-Magog Hills およびその他 Cambridge から５マイル以内の地域で慣例として行われるある種の競技に学生がしげしげ通う」のを禁じ，違反した者が再度，繰返したら，６ペンス８シリングの罰金を科し，そして夜８時以後に違反をすれば，罰金を20ペンスまで増額するという法令を出した。さらに給費生の学生主事がみずから罰金を支払うことを要求され，それを拒否すれば，彼等の財産は没収されるかもしれなかった。これら罰金の収入は，大学，違反学生の学寮，学生監そして権限奉持者の間で均等に分配された。[18] 今日，Gog-Magog で行われる唯一のゲームはゴルフであるが，16世紀においてはそれが，フットボールであったかもしれない。というのは，当時，Oxford と Cambridge の両大学では，フットボールを行いにフィールドに行くのが慣例であったからである。

この例は，Cambridge のフットボールの選手と Chesterton の地方の選手たちとの間に争

いごとが生じた1579年にみられた。

Cambridgeのある学生たちとChestertonの住民若干名との間で試合が行われたとき，Thomas ParishはChestertonに住む主任治安官であった。2年ほど前のこと，フットボールを行うために，上記学生は何ら武器を携行せず平和的にかの地へと向かい，一方，上記Chestertonの町民はChestertonの教会のポーチに棍棒を隠しておき，競技の最中に学生らに喧嘩を吹っかけ，棍棒を取り出して，それでもって学生らを殴ったので何人かは頭を打ち割られ，何人かは他の他の個所をしたたか打たれ川を渡って逃げる羽目となり，また何人かは治安官のParishに対して公共の治安を維持するよう大声で訴えたが，相手方に加わってフットボールをしていた治安官は学生の方に向かって治安を維持するよう求めた。[19]

1613年，Cambridgeにおいて，王の御前で，Peter HaustedによるThe Rivall Friendsの演劇がなされたが，これはフットボールが登場人物の名前，つまり文学士であり相手の脛を蹴ることで羨むべき名声を得ているHammershinという名を示しているイングランド唯一の劇であるかもしれない。

いやなに，諸教区の勇敢な人たちがあちこち彼を求めて人を遣っているのです。フットボールの試合をさせるために。本当に彼こそは，この州が自慢できる唯一のHammershinなのですぞ。彼のおかげで，脚や腕を無傷のままにしておける従僕など1人もいないし，人の骨を折ってくれるというので彼は40マイル四方の外科医たち全員から年金をもらっているのですぞ。[20]

学寮の当局は市民と大学側のフットボール場でのこの類の接触を認めなかった。1580年12月に副総長と学寮長らは，学生たちがそれぞれの学寮の外でフットボールを行うのを防止するために布告を発した。1851年5月にこの命令が，ReterhouseのDr.Perryによって，実質上，繰返された。すべての遠征試合は禁止され，学生は次の条件でフットボールを行うのが許された。

いかなる地位・身分の学生にもあれ，以後，各自の学寮の構内を除いてはいかなる場所いかなる時においてもフットボールをなすべからず，また，いかなる部外者又は他の学寮の学生を相手としあるいは彼等とともに他の場所にて競技をなすべからざること…。[21]

学生たちは，他の学寮と競技することさえも許されていなかったことは注目される。このことは，1620年のSir Simmonds D'Ewesの日記を考察することによって説明が可能となるであろう。日記から，Cambridgeにおける学寮対抗のフットボールの試合が行われたこと，時としてフットボールをめぐる騒動が持ち上がったことがわかる。

（1620年），3月29日の晩に，Simmondsは「ある激しいフットボールの試合」が行われる予定だと聞いたので，夕食後，「Sheep's Greenと呼ばれるQueen's Collegeの裏手の広々としたフィールド」へ出かけた。……（フットボール）……各学寮に属する「greens」に限られていたのである。Trinity collegeのgreenは現在，Nerille's courtのある場所の近くにある。D'Ewesの時代には，フットボールの選手たちは2つの「党派に分かれ，一方はSt. John's Collegeを旗頭とし，他方はTrinity Collegeを旗頭としていたらしく，又，彼がフィールドに着いたとき，自分の党派（St.John's）がフィールドを占拠しているのを知り，相手方は敢えて姿を現さなかったらしい。しかし，彼は競技に参加し，脛の骨を折って自室に戻った。この数日後に，彼は同じ場所での別な会戦へと出かけて行ったが，今度もまた（Trinity派）は臆病風に吹かれた。そこで，St. John's派は傍若無人になった。そして学寮に戻る

と St. John Barleycorn と口論していた一番勇ましい連中のうちの何人かがこのように立て続けに肩すかしを食わされたことに対して怒りをぶちまけるために Trinity の裏門を襲撃して打ち破り，遊歩道にいた人たちを皆長い棒で追いたてて学寮の中に逃げこませ，ある文学修士に対して相当の暴行を加えた。」

「しかし，甘い食物には酸っぱいソースが付き物の長い時間をかけてもちょっとした無分別の果実は抹消できぬもの。」翌朝早く，Trinity の文学修士の数がこれらの勇ましいすぎる闘士たちのことを Dr. Gwynne に訴えに来た。そして本格的な尋問の後，「その場に居あわせた者は皆，暴行の罰ありと宣せられた。」そして，刑罰は結局，小額の罰金に軽減されたが，Symmonds は罰の実行には「何ら関与しなかった」ものの面目を失った。[22]

このことは，大学当局を刺激し，主謀者たちは，当然のごとく罰せられた。1620年に学寮対抗の試合があったこと，そして是認された競技場がすでに存在していたことは興味深いことである。

学生のスポーツに対する熱意と自分の学寮に対する盲目的忠誠心の最も古い表現として，A Meer Scholar (1615) において，1595～1598年に Qxford の Queen's College に在学した Sir Thomas Oberbury (1581～1613) が言ったとされる言葉は特に興味深いものである。

真の学生は利口な馬鹿である…。自分の大学の歴史の古さが信条であり，自分の学寮の優秀さ（といっても，フットボールの試合にかけてのことにすぎないのだが）が信仰箇条なのだ。[23]

Oxford においてフットボールは Cambridge の Gog-Magog Hills のような Bullington Green の上で行われていたが，そこは20世紀初頭まではクリケットのグラウンドであったが，現在ではゴルフ場になっている。このことは，Oxford の学生が，将来，フットボールのためのスペースを作るために，どのようにして「フットボールの試合の最中に Bullington Green の3エーカーばかりを含む（人によっては30エーカーとも言うが）フィールドを焼いた」かを記述している1608年2月26日の写本の記録からわかる。[24] フットボールを行った修士，学士又は学生のための1584年に定められた罰則は，初犯については20シリングの罰金と禁固，再犯においては40シリングの罰金，第3犯においては，累進的罰金と除籍であった。これは，18歳以上の学生に対するものであった。

一．本大学に居住する多数の司祭また特に不在聖職禄所有者が，公然とフットボールを行いかつ喧嘩をして本大学と聖職との名誉を傷つけることの確実なる事実に鑑み，司祭または助祭たる者がフットボールをすべくフィールドに入り，あるいは乱闘又は喧嘩をなすべく武器を携行したる場合は，本人は直ちに本学より追放せられ，その追放の事実を通報すべく（本人が聖職禄を保有する時は）司教区の司教宛に特別の書状が送られ，かつ本人は大学における研究を口実となすものその咎を免る能わざるものとす。さらに聖職者にあらざる18歳以上の修士，学士，または学生が本規定に明記する事項のいずれかに違反せる場合は，初犯においては20シリングの罰金を支払うと共に治安を乱したる時は投獄され，再犯においては，40シリングの罰金および，上記と同様投獄の罰を受け，第3犯においては，大学を追放され復籍さるることなきものとす。

また18歳以下の者が本規定の趣旨に違反せるにおいては，副総長又は学生監の裁量に従い，聖マリア教会において公開の罰を受くるものとす。[25]

その命令は，司祭又は助祭でさえ，彼等は時々，フットボールのゲームに夢中になっていたのであるが，「本大学と聖職の名誉を傷つける」と

明示している。

大学の構外と同様，校外での聖職者のフットボールは14世紀のように16世紀においても問題であった。フットボールを行う一連の修道士たちの最初の人物が登場する。ここで問題になる修道士は，Hawridge の St. Mary 教会の助任司祭であるが，彼は1519年にフットボールを行ったことで司祭の激怒を買った。彼はシャツ姿でフットボールを行ったと言われており，Chesham の近くから Hawridge の教会まで大急ぎで行き，そこでは愛好する娯楽の時間を多くとるために終課を含むその日の聖務日課を全部読んでしまうのをこととしたので，罰深さをいっそう大きくした。彼はすみやかに聖職禄を剥奪された。[26]

王政復古の後，他にも同様の例があったが，それはスコットランドの聖職者でさえ免れることはなかった。大司教の James Law は Lothian は Kirkliston の司祭の時，主の日にフットボールを行ったとして，1585年に Lothian の教会会議によって非難された。[27] 1638年12月5日，Lanark は Glassford の司教である Robert Hamilton は，「安息日に，教区民をあおりダンスやフットボールを行わさせたので，イングランドの流儀に従い，安息日に対する冒瀆者である。」とされた。しかし，本人が実際に自分でフットボールを行ったことは告げられていない。[28] このような例は，異状なことではない。というのは，Sir David Lindsay が，1535～40年ごろに著わした著書，A Satire of the Three Estates において，フットボールに没頭していた司祭について紹介しているからである。

私は祈祷しないけれど，テニスのやり方は知っている。

あなたがたはフットボールをより上手にやれる人が誰もいないことを知っている。[29]

概して，若い聖職者が大学の雰囲気に負け易く手近にあるフットボールのゲームに参加したことは驚くべきではなかった。同じ Oxford の学則から若い聖職者たちは喧嘩を助長する目的で武器を携行しがちでさえあったことが推測される。これらは極めて憎むべき犯罪行為であったが，多分に，当時の若者には自然のことであったかもしれない。

Bullington Green でのフットボールから四半世紀を経た1636年に大主教の William Laud が大学の総長を務めていた時に交付されたオックスフォード大学学則は，特にフットボールを名指しした厳しい禁止令を定め，他の様々な禁じられたスポーツや娯楽にふれた後に次のように述べている。

同様に，いかなる身分の学生たりとも（とりわけ，既に学位を取得したる全学生は）大学内又はその構内において（いわんや，市の公共の通りや広場においては）彼等同志のみたると市民と共同たるとを問わず，フットボールをなすべからざるものとす。[30]

Charles I 世による Declaration of Sports の再公布を支持し，他の方法でゲームや娯楽を支援した William Laud が自分の大学のメンバーたちにスポーツや娯楽に極めて厳しかったのは不思議である。しかし，彼の見解において，学生にとって1つの法，極めて厳しい法が必要であったのであろうが，一般市民にとっては日曜日でさえ，多くの自由があったのである。

結

本研究では，16世紀そして17世紀におけるフットボールの宗教上の問題とはまったく関係のない様々な見解について追研した。Thomas Elyot のように，フットボールを，獣的な憤怒と極度の暴力の他は何もないとして非難した者もいるし，Richard Mulcaster のように，フットボールを，普通は粗野な群集が集まり，脛に穴をあけたり，脚を折ったりして行われているために作法にかなったものとは言えないが，フッ

トボールを適切に利用することによって，健康増進のためにも体力養成のためにも大いに貢献し，教育的に際立った効果があるとフットボールに価値を見出した者もいた。

16世紀の文献において，フットボールを行っているかもしれない少年たちについての言及は数多くあるが，確実にフットボールを行ったことについての言及は，1633年 David Wedderbarn によるテキスト・ブックである Vocabula において初めてなされている。一般的には，16世紀そして17世紀にはすべての学校の生徒たちがフットボールを行っていたと看做すことができ，いまだにイートン校やウィンチェスター校などによって行われている独自のゲームの起源はこの時代に属するものであろう。

16世紀そして17世紀における大学のフットボールについては，乱暴な街路のフットボールが学生に人気があったようである。大学と市民間そして大学の学寮間でしばしばフットボールのゲームが行われていたようであるが，時としてフットボールをめぐる騒動が生じたため，大学の学則でフットボールが禁止されている。

註及び引用・参照文献

1) H. H Scroft ed., The Boke named the Governour by Sir Thomas Elyot, edited from the lst edition (London, 1880), I, p. p. 294-96. quoted in Magoun, History of Football from the Beginning to 1871, p. 21. (原典：Some men wolde say, that in mediocitie, which I have so moche praised in shootynge, why shulde nat boulynge, claisshe, pynners, and koytyng be as moche commended? Verily as for two the last, be to be utterly abjected of al noble men, in like wise footeballe, wherin is nothinge but beastly furie and extreme violence; wherof proceedth hurte and consequently rancour and malice do remaine with them that be wounded ;wherfore it is to be put in perpetual silence.)

2) Op. cit., (ed. 1603), p. 120. quoted in Magoun, ibid., p. 57.

3) galyardes:16-17 世紀に流行した2人で踊る拍手の軽快なダンス。

4) The Castell of Healfh, corrected and augumented by the first author thereof, Sir Thomas Elyot, Kt. (London:Powell, 1541), fol. 50, quoted in Magoun, ibid, p. 21. (原典：Vehement exercise is compounde of violent exercyse, and swyfte, whan they are joyned together at one tyme, as daunsinge of galyardes, throwinge of the ball and renning after it:football playe may be in the numbre therof ….)

5) Op, c: t., (ed. 1589), p.2, quoted in Magoun, ibid., p. 21. (原典：…there is very great profite in moderate exercises. But there is great diffrence of exercises. …Some are vehement, as dansing, leaping, football play.)

6) 主顕祭：救世主の御公現の祝日；Magiによって代表される異邦人に対してキリストが自己顕現したことを記念する1月6日の祭り。

7) 四旬節：毎年，復活節の準備のために行われる断食と改悛の期間；灰の水曜日に始まり復活節までの主日を除いた40日間。

8) Ed. Paris, 1670, pp. 212ff. :ed. 1698, p. 138 (pt. i), quoted in Magoun, ibid., p. 54.

9) Op. cit., Advertisement No. 43. quoted in Magoun, ibid, p. 53.

10) Sir Richard Carew, The Survey of Cornwall, London, 1602, pp. 75-6, quoted in Marples, A History of Football, London, 1954, p. 68. (原典：I cannot well resolve, whether I should the morl commend this game, for the manhood and exercise, or condemn it for the boysterousness and harmes which it begetteth: for as on the one side it makes their bodies strong, hard and nimble, and puts a courage into their harts, to meete an enemie in

the face:so on the other part, it is accompanied by many dangers.)

11) Sir George Owen, The Description of Pembrokes hire, 1603, quoted in Marples, ibid., p. 68. (原典：The players contend not for any valuable things, but only for glory and renowne first for the fame for their country in general and next each person to wynn praise for his actyvitie and prowes, which two considerations ardently enflameth the myndes of ye youthful people to stryre to the death for glorie and fame which they esteem dearer than their worldly wealth.)

12) Richard Mulcaster, Positions, London, 1581, pp. 104-105. (原典：The second kinde I make the Footeball play, which could not possibly have growne to this greatnes, that it is now at, nor have bene so much used, as it is in all places, if it had not had great helpes, both to health and strength. And to me the abuse of it is a sufficient argument that it hath a right use: which being revoked to his primitive, will both helpe, strength, and comfort natare, though as it is now commonly used, with throwngingof a rude multitude, with bursting of shinnes, and breaking of legges, it be neither civil, neither worthy the name of a any traine to health. Wherein any man may evidently see the use of the trainingmaister. For, if one [a trainer] stand by, which can judge of the play, and is judge over the parties, and hath authoritie to commaunde in the place, all those inconveniences have bene, I know, and wilbe I am sure very lightly redressed, nay, they wil never entermedle in the matter, neither shall there be complaint, where there is no cause. Some smaller number with such overlooking, sorted into sides and standings [playing positions], not meeting with their bodies so boisterously to trie their strength:nor shouldering or shuffing one an other so barbarously, and using to walke after, may use footeball for as much good to the body, by the chief use of the legges, as the arm ball, for the sawe, by the use of the armes. And being so used, the Footeball strengtheneth and brawneth the whole body, and by provoking superfluities downeward, it dischargeth the head, and upper partes, it is good for the bowells, and to drive downe the stone and gravell from both the bladder and kidneies. It helpeth weake hammes, by much moving, beginning at a meane, and simple shankes by thickening of the flesh no lesse then riding doth. Yet rash running and to much force oftentimes breaketh some inward conduit and bringeth ruptures.)

13) Op. cit., (London:Pynson, 1519), fol, p. 282., quoted in Magoun, ibid., p. 20.

14) David Wedderburn, Vocabula, /Cum allis nonullis/Latinae Linguae/Subsidiis /In eorum gratium, qui prima/Latini Sermon's tyrocinia/fociunt/ (Edinburgh: Andrew Anderson, 1700). p. 37, quoted in Magoun, ibid., p. 94. (原典：Sortiamur partes:tu primun socium dilige: Qui sunt nostrarum partium huc se recipiant: Quot nobis adversantur? Excute pilam ut ineamus certamen: Age, huc percute: Tu tuere metum: Praeripe illi pilam si possis agere: Age objice te illi: Occurre illi: Repercute pilam: Egregie, very well: Nihil agis, ye do nothing: Transmittere metum pila, to give the hail. Hic primus est transmissus, this is the first hail. Hic secundus, hic tertius est transmissus: Repelle eum, alioqui, adrersarii evadunt superiores. Nisi caves jam occupabit me tam. Ni melius a nobis ludatuv, de nobis actum est. Eia penes vos victoria est. Io triumphe. Est pilae doctissimus, he is a

brave ball man. Absque eo fuisset, reportassimus victoriam, had he not been, we had won. Age, subservi mihi, take heed and serve me. Adhuc potiores habemus, scilicet partes, we have get the likiliest of it.)

15) A. K. Cook, About Winchester College (London, 1917), p.20, quoted in Magoun, ibid., p. 51. (原典：Saepe repercusso pila te iuvat icta bacillo, Seu pedibus calcatur tuis: his lusibus uti Innocuis fas est …)

16) E. A. Bond (ed), Statutes of the Colleges of Oxford Ⅲ, Oxford and London, 1853, p. 66, quoted in Magoun, ibid., p. 73.

17) ロード主義：英国教会はローマカトリック教会よりも原始教会の信仰と実践を多く保存しており国王は神様によって支配しているとする。

18) Charles H. Cooper, Annals of Cambridge (Cambridge, 1843), Ⅱ, p. 321, quoted in Magoun, ibid, p. 73.

19) Ibid., p. 321, quoted in Magoun, ibid, p. 73. (原典：Thomas Parishe being head constable dwelling at Chesterton, when ther was a match made betwixt certain Schollers of Cambridge and divers of Chesterton; to play at football, abowt twoe yeres past, the sayd schollers resorting thither peaceably withowte anye weapons, the sayd townsmen of Chesterton had layd divers staves secretly in the church porch of Chesterton, and in playing did pike quarells agenst the Schollers, & did bringe owte there staves wherewith they did so beat the schollers that divers had there heads broken, divers being otherwise greatly beaten, wear driven to runne throughe the river, divers did crye to Parish the constable to keep the Queene's peace, who then being a player at the foote ball with the rest did turne to the Schollers, willing then to keep the Queene's peace.)

20) Op. cit., (London, 1632), Sig. Gir., quoted in Magoun, ibid., p. 46. (原典：Ant. you there Colosse?Stutch. My name is Stutchell Legg. Ant. Troth, and thou art well underlay'd indeed, A couple of foot-ball players I warrant them.)

21) Charles. H. Cooper, ibid., p. 382, quoted in Magoun, ibid., p. 73. (原典：… that no scholar of what degree or condition soever he were, should at any place or at any time hereafter, play at the foo t-ball, but only within the precincts or their several colleges, not permitting any strangers of other colleges or houses to play with them or in their company, and in no play. else.)

22) J. H. Marsden ed., College Life in the Time of James the First, as illustrated by an Unpublished Diary of Sir Symonds D'Ewes, Baronet and M. P. for some Time a Fellow-commoner of St, John's College, Cambridte (London, 1851), pp. 94-96, quoted in Magoun, ibid., p. 76. 〔原典：In the evening of March 29 (1620), Symonds went out afrer supper to 'a spacious field at the back of Queens'College called Sheep's green' having heard that there was to be 'some hot football playing' … (football) was restricted…to certain 'greens'belonging to the several colleges. Trinity green was near the site of the present Neville's court. It appears that in D'Ewes's time the football players were divided into two'factions', the one headed by St. John's, and the other by Trinity, and that when he arrived at the field, he found his own faction (St. John's) in possession of it, their adversaries not venturing to show themselves. He got engaged in the game, however, and returned to his chamber with broken shin A few days after this he went to another meeting in the same place, and ag ain, 'the Trinitician faction'should the white feather. Upon this the Johnians grew isolent:and'as they returned to their

college, some of the lustiest of them, who had been bickering with Sir John Bavleycorn, in order to show their anger on being thus continually delded, set upon the back gates of Triniyty, and brake them open, and with long poles drove into the college all they found in the walks, offering some violence even to a Master of Arts.'

'But sweet meat hath sour sauce. A long time will not obliterate the fruits of a little rashness'. Betimes the next morning come some Masters of Arts of Trinity to complain to Dr. Gwynne of these over-valiant champions: and after a serious examination, 'all who were present were declared to be guilty of the outrage? And although the punishment was at length brought down to a small pecuniary mulct, Symomds felt the disgrace, though in the actual offence he'did nothing.']

23) E. F. Rimbault, The Miscellaneous Works in Prose and Verse of Sir Thomas Overbury (London, 1856), 87, quoted in Magoun, ibid., p. 74. 〔原典：A meer scholar is an intelligigble asse …The antiquity of his University is his creed, and the excellency of his College (though but for a match at foot-ball) an article of bis faith.]

24) Bodleian Library Oxford, in the Brian Twyne Mss., No. XXI, p. 85, quoted in Magoun, ibid., p. 75.

25) Strickland Gibson (ed.), Statuta Antiqua Universitatis Oxoniensis (Oxford, 1931), pp. 431-2, quoted in Magoun, ibid., p. 74. 〔原典：Item. it beinge crediblie informed that diverse ministers abidinge in this universitie, especially nonresidentes, so use open plainge at football and maintaininge of quarelles to great discredit of this universitye and the vocacion wheare unto they are called. It is theare fore provided that, if any minister or deacon shall go into the feelde to playe at football or beare any weapon to make any fray or mainetaine anye quarell, he shall forthwith be banished the universitie and a speciall letter sent to the Boshopp of the dioces (if he be beneficed) to geve intelligence of his banishment, and that he cannot under pretence of studie in the universitie be absent from his charge. It is furder provided that, if any master, Bachiler, or scholler not beinge ministers, beinge above the age of eightene, shall offend in any of thease thinges in this statute spec ified, he shall forfeite for the first time xxs. and suffer imprisonment as in case of perturbance of peace; the second time xls. and to suffer as before; the third time banishment of the universitye without restitution.

And if it happen any person beinge under the age of eightene to offend against the meaninge of this statute, he shall suffer open punishment in St. Marie's Church accordinge to the discrecion of the Vice-Chauncellor or Proctors.]

26) Francis Colman in the Morning Post, Aug. 20th, 1930, quoted in Magoun, ibid., p. 20.

27) Hew Scott, Fast:Ecclesiae Scoticanae (rev. ed., Edinburgh, 1915), I, p. 212, quoted in Magoun, ibid., p. 90.

28) Robert Baillie, Letters and Journals (Ed inburgh, 1775), I, p. 126, quoted in Magoun, ibid., p. 94.

29) F. Hall (ed.), Sir David Lyndsay, Ane Satyre of the Thrie Estatis (EETS, Orig. Ser. NO. 37, 1869), p. 505, quoted in Magoun, ibid., p. 88. (原典：Thocht I preich not, I can play at the caiche; I wait thair is nocht ane among yow all, Mair ferilie can play at the fut-bal.)

30) G. R. M. Ward, Oxford Univ. Statutes,

vol. I (London, 1845), p. 161, quoted in Magoun, ibid., p. 77. 〔原典：In like manner, No scholars of any condition (and last of all graduates) (it is firmly laid down) 'are to play at football, within the University or its precinct (and particularly not in the public streets and places of the city), whether alone by the mselves, or in company with townsmen… nor are they to appear as lookers on at such pastimes.〕